The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	外来語に現れるファ行子音の音声変異 : ハ行音化現象と原音[f]の流入
Author(s)	小原, 貴子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2010, 44, p. 35-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8168
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

外来語に現れるファ行子音の音声変異

――ハ行音化現象と原音［f］の流入――

小　原　貴　子

1.　はじめに

本研究は、現代語において外来語に現れるファ行子音の音声変異の現れ方、特にハ行音化現象と原音［f］の流入の実態を明らかにすることを目的とする。

［ɸ］から［h, ç, ɸ］へと分化した日本語の語頭ハ行子音の歴史的な変化の結果、体系の「あきま（服部1953）」となっていた部分を埋めることで登場したのが、西洋語の［f］を写すのに必要となったファ行音である。「ファックス」の「ファ」や「オフィス」の「フィ」などは、五十音図になく、外来語にしか現れないことから外来語音と呼ばれ、日本語の音韻としては不安定なものとされている（松崎1993、井上2002など）。実際「フィ」を「フ**イ**」と2拍化（例：フ**イ**ルム）させたり、「フォ」を「**ホ**」とハ行音化（例：ヘッド**ホン**）させたりすることがあり、語形として表記に揺れの見られるものも少なくない。しかし、ハ行音化は臨時的な音声変異として、表記に揺れのない語にも観察される。

その一方、近年、外国語教育の目覚しい普及の影響で、外来語音の原音重視の風潮も強くなってきている。「ティ・ディ」などの発音が以前に比べて一般化したのは、原音重視の傾向が外来語音の定着につながったと考えられる。しかし、［ɸ］で発音されるファ行子音は、西洋語の［f］の代用に過ぎないため、外来語音として「ファ・フィ・フェ・フォ」の子音を［ɸ］

にして一拍で発音ができるという段階から、さらに一歩進んだ現象として原音［f］が外来語としての発音に現れる可能性がある。現に永田（1988）は、「ファイト」で若年層に［f］が現れたと報告している。

外来語音については、従来、日本語音韻体系に関する議論（服部1953、松崎1993、井上2002ほか）や年代差や学歴差などを明らかにする社会言語学的調査（加藤1983、永田1988）が主流であった。本研究は、音韻体系のレベルではなく、音声変異という音声学のレベルで、ハ行音化と原音［f］の流入という二つの現象を扱う。そのため、調査は若年層対象に表記にゆれのない語を中心に発話実態調査を行った。音声変異の現れ方に影響する条件としては次の4つを設定した。

・言語内的条件　　1. 子音位置（語頭か語中か）2. 後続母音

・言語外的条件　　3. 話者の英語との接触度　4. 発話に対する注意度

調査の結果、ハ行音化現象には音韻環境、原音［f］の現れ方には話者の英語との接触度が影響することがわかった。発話に対する注意度から、ハ行音化した［h］や［ç］の威信が低く、［f］の威信が高いことも明らかになった。ただし、［f］と［ɸ］を使い分ける話者も少なからずおり、今後［f］が増え続けるとはいいにくいという結果が出た。

以下、2節で先行研究と本研究の位置づけ、3節で調査概要について述べたあと、4節で結果と考察、5節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

本節では、外来語発音に関する先行研究と本研究の位置づけについて述べる。

外来語発音に関する調査は、石野（1974）が150語を対象に郵送意識調査を行ったのを皮切りに、その後、実際に面接して「なぞなぞ」に答えてもらうといった形式の発話調査が何人かの研究者によって行われている。

このうちファ行音に関連するものは、加藤（1983）の「フィルム」と永田（1988）の「ファイト・フォーク・テレフォン・オフィス・フィルム・フューズ」であるが、どちらも年代差、学歴差を指摘している。永田（1988）は「ファイト」について若い世代で［f］があったと報告しており、読み上げ調査や意識調査などの結果と合わせ、［f］が威信の高い形であろうとしている。

これまで外来語発音に関しては、各外来語の流入時期や外来語表記の問題との関わりから、外来語特有の音節が日本語本来の音韻体系にどこまで定着したといえるかといった音韻論的解釈が主にその争点となっていた（服部1953、松崎1993、井上2002）。それに対し、本研究は、原音［f］と表記に現れないハ行音化現象に焦点を当て、音声学的な視座から外来語発音の実態を把握することに重点を置き、表記にゆれのない語を中心に注意度別発話音声収録調査を行う。語頭か語中かという子音位置や後続母音の種類といった言語内的条件、話者の英語との接触度、発話に対する注意度といった言語外的条件を変数として設定し、どのような要因がハ行音化や原音［f］の出現を促進するのかを明らかにしたい。

3. 調査概要

本節では、発話調査の概要について述べる。3.1.で発話者、3.2.で調査語、3.3.で調査方法、3.4.で判定方法について述べる。

3.1. 発話者

本節では、発話調査に参加した計41名の発話者について述べる。表1に発話

表1　発話者

	接触	中間	非接触
接触度	8ヶ月以上の英語圏への留学経験者	1ヶ月程度の海外滞在経験者や英文科・英語サークルに所属する人	特に外国語に興味のない人
人数	14名（男7・女7）	13名（男8・女5）	14名（男7・女7）
年齢	18～29歳		
職業	大学生・大学院生		

者の属性とカテゴリーを示した。

原音［f］が現れるかどうかといった調査のため、対象は若年層の大学生・大学院生に限った。接触度とは英語との接触度で、英語圏への留学経験の有無やその期間、英語に関わる専門かどうかなどの観点から「接触・中間・非接触」の3つのカテゴリーで、話者を集めた。

話者の出身地は西日本が中心であるが、関東方面の話者も数名混じっている。沖縄県の宮古島や青森県西部のような、方言の音韻体系に［f］が現れる地域の出身者は含まれていない。専門分野は「非接触」「中間」の男性に理系の学生が多く、「接触」は文系の言語に関わる専門の学生が多い。

3.2. 調査語

本節では、調査語について述べる。表2に調査語の一覧を挙げる。調査語は表記に揺れのないものを中心に選んだ。子音位置（語頭vs.語中）や後続母音による違いを見られるよう、また、日本語への定着度なども考慮しつつ選んだ。また、比較対象として、表記にゆれのある「ユニフォーム（ユニホーム）」、英語を加えた。

表2　調査語

	母音	語頭		語中	
英語		five	for	different	
外来語	/-i/	フィルム		マフィア	オフィス
		フィフティーフィフティー		ノンフィクション	スフィンクス
	/-e/			パフェ	カフェイン
	/-a/	ファックス		ソファー	
	/-o/	フォーク		ユーフォー	ユニフォーム
				パフォーマンス	
	/-u/	フーリガン[1]		ナイフ	インフルエンザ

1「フーリガン」はhooliganでfはつかないが、当時話題の語でもあったため、原語で f のものとの比較で採用した。

3.3.　調査方法

本節では、調査方法について具体的に説明する。

この調査は2002年夏から秋にかけて実施した。発話者の音声の録音はSony DAT（TCD-D100)、SonyエレクトレットコンデンサーマイクロホンECM717を使って行った。口元の動きを見るため、発話者が発話する様子を斜め前方からPanasonicデジタルビデオカメラNV-DL1を使って録画した。録音場所としては、主に大阪大学言語文化研究科6階の収録室を利用したが、発話者や調査者の自宅で行ったり、一般教室を使ったりした場合もある。

調査方法はLabov（1972)、Trudgill,（1974）に倣ったが、ファ行子音を含む外来語を調査場面以外で自然に発話してもらうのは難しく、「くだけた言い方」は収録できなかった。調査語に注意が向かないような方法としては「絵を見て話す」という方法を採用したが、これもすべての調査語は盛り込めなかった。以下、注意度の低いものから、①絵を見て話す　②文章読み上げ　③なぞなぞ式　④単語読み上げの4種類の調査について述べる。

①　絵を見て話す

まず絵を1枚ずつ（計2枚）見せ、そこにかかれているものを詳しく描写してもらう。次に4枚の絵を一度に見せ、その絵にかかれているものをすべて使ってお話をつくってもらう。目的とする語が出てこない場合は適宜質問し、そのことばが出てくるように誘導する。以下に例を載せる。1は1枚の絵を描写するタスクで、2はお話を作るタスクである。調査語は「フォーク」のように四角で囲んだ。（　）内は調査者の発話である。

1　**んと、男の人が、たばこー、を、葉巻をくわえていて、で、あの、縦じまのジャケットを着ていて、右手にフォークを持っていて、で、パフェを食べています。パフェはりんごと、あと、アイスクリームと、ウエハースがあって、で**

も、男の人はあまりうれしそうじゃなく、悲しい暗い顔をしています。（男の人はどんな仕事をしていそうですか。）**そうですね。マフィアのドン。{笑}**

2 **えっと、ちょっと、この話は近未来の設定で、いきなりUFOがやってきて、みんな逃げまどってるんですけど、この人達、逃げてる人達の中にカメラを持ってる人がいて、決定的瞬間をたくさん撮った、そのフィルムがこれで、で、UFOが飛んできてるので、このビルにいる人達は、すごい大慌てで、この男の人は、ま、自分のじ、今までの人生を振り返っていて、で、家族へ、その、ありがとう、今までありがとうというメッセージを書いているところで、この人達も、家族にメールを送って行って、電話をかけているところで、で、そうなんですけど、で、結局このUFOに乗った人達が、地球を乗っ取って、みんないなくなるんですけど、このエジプトだけは無事に残って、で、えーと、誰もいなくなったんですけど、この場所だけが、地球の文明の残った証拠、として残っています、という話です。{笑}**（あー）**すみません、うまくできないですね。これ**（で、最後に残ったものは何ですか）**え、これ、あの、スフィンクス、え、これ、なんて言うんでしたっけ。**（はい、そう、それです）**スフィンクス**（それが残ってたんですね）**はい**（あとはみんな滅びちゃった）**滅びてしまいました。**

② 文章読み上げ

8枚のカードに書かれた文章を5回ずつ連続で読み上げてもらう。うち7枚は日本語の文で、最後の1枚のみ英語の文が書かれている。カードは1枚ずつ提示し、一度黙読してから、朗読するように指示した。読み間違えた場合はその場で言い直すこととしたが、調査語と関係のないところで読み間違えた場合はとくに読み直しを要求しなかった。以下に1枚目と8枚目のカードに書かれた文を掲載する。調査語には①同様、四角の囲みを施すが、実際のカードには何も示されていない。

1 **サッカーのユニフォームを着た若者たちがおおぜい橋の上で騒いでいます。**

これも、外国のメディアに言わせると一種の[フーリガン]でしょうか。

8 **How long did you stay there?　　ー Just [for] [5] days.**

③　なぞなぞ式

「コーヒーの中に入っている眠れなくなる成分は？」というようなヒントを出し、外来語を引き出す。答えがわかったら、そのことばを5回連続で言ってもらう。答えがなかなか出ないときには「さっきの文章に出ていましたよ」というようなヒントも出した。

④　単語の読み上げ

カードに一語ずつ書かれた単語を読み上げてもらう。これは5回連続ではなく、24枚のカードをランダムに配列したものを5セット用意し、一回ずつ読み上げるというものである。カタカナで書かれているものは日本語として、アルファベットの小文字で書かれているものは英語として読むよう指示をした。ただし、「UFO」は日本語で読むよう指示し、「ユーフォー」という語形を引き出すようにした。

以上、4種類の調査のあとで、調査目的に気付いたかどうか、それはどのあたりでか、普段の外来語発音についての意識、各語の使用頻度、普段の英語との接触度などを尋ねるインタビューを行った。

3.4.　判定方法

音の判定は、筆者が基本的に耳で行い、適宜ビデオの映像や音声分析ソフトwavesurferの広帯域スペクトログラムを参考にした。原音［f］もハ行音化も中間的なものは［ɸ］とし、明らかなもののみを［f］［h, ç］とした。しかし、筆者一人の耳だけでは、主観的な分析である感を免れず、データの信頼性に問題が残る。そこで、単語の音声を聞いてそのファ行子音を選択する形式の聴解テスト（50問）を作成し、9割以上の正解者4名に全データの10～20％（1200～2800語）の判定を依頼した。判定結果を照合した

ところ、筆者の判定が4名中3名以上の判定と8割の水準で合致した。

4.　結果と考察

4.1.　全体の結果

全41名の発話を分析した結果は表3のとおりである。

「ユニホーム」は「ユニフォーム」とも書かれ、表記にゆれがあるため、「ユニフォーム」のハ行音化は他の外来語のハ行音化とは別に取り出した。ハ行音化した「ユニホーム」が138例、「ユニフォーム」全体の総数が410例で、33.7％がハ行音化したことを示す。

表3　全体の結果

	度数	総数	（%）
ユニホーム	138	410	33.7
ハ行音化	415	8407	4.9
外来語［f］	2319	10921	21.2
英語［f］	494	1022	48.3

「ユニフォーム」以外のハ行音化は5％弱と低かった。しかし、音声はハ行音化していても、インタビューで意識を尋ねた際は41名中33名がハ行音化語形を使わないと答え、意識と実態の乖離が目立った。中にはハ行音化した「ユニホーム」を語形として見たことも聞いたこともないという話者がいた。

［f］は、英語で48.3％、外来語で21.2％現れている。英語でより多く現れているのは当然としても、その値に予想したほどの開きがない。英語でも［f］が現れるのは半分程度ということで、英語としての［f］であってもなかなか［f］とは発音されない（あるいは発音できない）ことが窺える。

以下、それぞれの条件に分けて、結果を記す。

4.2.　言語内的条件

4.2.1.　子音位置（語頭vs.語中）

表4に子音位置でのハ行音化と［f］の割合を示す。

ハ行音化は圧倒的に語中で割合が高くなっており、１％水準での有意差が出た。語中位置の /ɸ/ がより不安定で、ハ行音化しやすいことがわかる。

表４　子音位置（語頭 vs. 語中）

		度数	総数	（％）	z0	
ハ行音化	語頭	52	2579	2.0	8.222	**
	語中[1]	363	5828	6.2		
外来語［f］	語頭	629	3193	19.7	2.521	*
	語中	1690	7728	21.9		

1　ハ行音化語中に「ユニホーム」は含まない。
*　５％水準で有意差あり
**　１％水準で有意差あり

［f］に関しても、語中に多く観察されたが、こちらは５％水準での有意差にとどまった。［f］はハ行音化ほど子音位置に影響されるわけではないようである。

4.2.2.　後続母音

表５と図１に後続母音別のハ行音化、［f］の出現数を示す。

/-i/ は「フィ」という音に関してどの程度ハ行音化が起こったかを示している。図１で黒い棒グラフはハ行音化を、網掛けの棒グラフは［f］の出現を表している。

表５　後続母音

	ハ行音化			外来語［f］		
	度数	総数	（％）	度数	総数	（％）
/-i/	118	3827	3.1	855	3827	22.3
/-e/	48	1314	3.7	319	1314	24.3
/-a/	6	1297	0.5	310	1297	23.9
/-o/[1]	249	1969	12.6	611	2583	23.7
/-u/				224	1900	11.8

1　ハ行音化 /-o/ に「ユニホーム」は含まない。

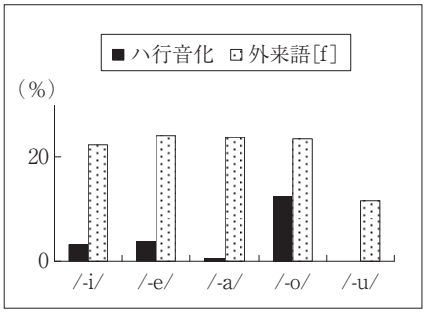

図１　後続母音

表５と図１からわかること、考えられることは以下のとおりである。

(1)　ハ行音化は /-o/ の場合12.6％で、/-i/ /-e/ の３％台と比べると３～４倍である。/-a/ のハ行音化は0.5％と極端に少なかった。/-o/ でハ行音化する割合が高くなるのは、円唇性を伴う調音方法の類似が原因かと思われる。類似していない /-i/ や /-e/ では円唇性が保

存されやすいのではないだろうか。また、後続母音 /-a/ でハ行音化が起こりにくいのは、ワ行音で唯一残っているのが後続母音 /-a/ の「ワ」であることなどからも納得が行くが、全く起こらないかというとそうでもなく、予備調査では「アスファルト」や「アルファベット」にハ行音化が観察されており、もっと長い語であれば、ハ行音化が起こったかもしれない。

(2) ［f］は /-u/ のみ11.8％と他より値が低い。それ以外のファ行音はだいたい22～24％と後続母音による差は見られない。［f］が /-u/ でのみ少なかったのは、「フ」が外来語特有の音というわけではないからだと考えられる。現代日本語では、和語も「ふ」は［Φ］で発音されるので［f］が入りにくいのかもしれない。

4.2.3. 語別

各調査語別の結果を、表6、表7に示す。

表4、表5に見るように、ハ行音化は語中で後続母音が /-o/ の場合に起こりやすいが、上位3語は二つの条件を満たすものである。ハ行音化が全く起こらなかったのは「ファックス」だけであった。語頭で後続母音 /-a/ というのがハ行音化の起こりにくい条件だと考えられる。

ハ行音化はさまざまな語に及ぶが、ハ行音化しても意味の理解に支障を来たすような例はなかなかない。外来語の場合ハ行音化による同音衝突がほとんど起こらないことも、ハ行音化を起こさせる要因のひとつとなっているのかもしれない。

［f］については英語か外来語音かの差は歴然としているが、それ以外についてはあまり傾向が見出せない。後続音 /-u/ の中では「フーリガン」の値が「ナイフ」「インフルエンザ」に比べて随分低い。実際、英語では hooligan とつづり、［f］を含まないが、このスペルが浮かんだ話者はたった二人だった。

表6　語別　ハ行音化

調査語	ハ行（%）	ハ行度数	総数	子音位置	後続母音
1 ユニフォーム	**33.7**	138	410	語中	/-o/
2 パフォーマンス	**24.1**	148	614	語中	/-o/
3 UFO	**10.2**	70	683	語中	/-o/
4 スフィンクス	**7.7**	52	673	語中	/-i/
5 パフェ	**6.1**	43	700	語中	/-e/
6 ノンフィクション	**3.9**	24	614	語中	/-i/
7 ﾌｨﾌﾃｨｰﾌｨﾌﾃｨｰ	**3.9**	24	614	語頭	/-i/
8 フォーク	**3.7**	25	672	語頭	/-o/
9 マフィア	**1.3**	8	629	語中	/-i/
10 オフィス	**1.1**	7	617	語中	/-i/
11 ソファー	**0.9**	6	684	語中	/-a/
12 カフェイン	**0.8**	5	614	語中	/-e/
13 フィルム	**0.4**	3	680	語頭	/-i/
14 ファックス	**0.0**	0	613	語頭	/-a/

表7　語別　[f]

調査語	[f]（%）	[f]度数	総数	子音位置	後続母音
1 five	**49.6**	203	409		
2 different	**49.0**	100	204		
3 for	**46.7**	191	409		
4 カフェイン	**28.0**	172	614	語中	/-e/
5 ユニフォーム	**27.4**	168	614	語中	/-o/
6 マフィア	**26.9**	169	629	語中	/-i/
7 ﾌｨﾌﾃｨｰﾌｨﾌﾃｨｰ	**24.9**	153	614	語頭	/-i/
8 ソファー	**24.9**	170	684	語中	/-a/
9 UFO	**24.5**	167	683	語中	/-o/
10 ノンフィクション	**24.3**	149	614	語中	/-i/
11 ファックス	**22.8**	140	613	語頭	/-a/
12 フォーク	**22.8**	153	672	語頭	/-o/
13 フィルム	**21.3**	145	680	語頭	/-i/
14 パフェ	**21.0**	147	700	語中	/-e/
15 スフィンクス	**20.4**	137	673	語中	/-i/
16 パフォーマンス	**20.0**	123	614	語中	/-o/
17 オフィス	**16.5**	102	617	語中	/-i/
18 ナイフ	**14.6**	98	672	語中	/-u/
19 インフルエンザ	**14.3**	88	614	語中	/-u/
20 フーリガン	**6.2**	38	614	語頭	/-u/

原語スペルの影響というよりは、語頭であることに加えて、[ɸ] の調音状態にもっとも近い母音 /u/ をさらに引き伸ばす長音であるということが、影響しているように思われる。

4.3.　言語外的条件

4.3.1.　話者の英語との接触度

表8、図2、図3に話者の英語との接触度によるハ行音化率と [f] の出現率の違いを示す。

この図からわかること、考えられることは以下のとおりである。

表８　接触度

	ユニホーム			ハ行音化			外来語［f］			英語［f］		
	度数	総数	（%）	度数	総数	（%）	度数	総数	（%）	度数	総数	（%）
非接触	43	140	30.7	180	2863	6.3	178	3731	4.8	81	350	23.1
中間	53	130	40.8	162	2654	6.1	588	3440	17.1	136	322	42.2
接触	42	140	30.0	73	2890	2.5	1553	3750	41.4	277	350	79.1

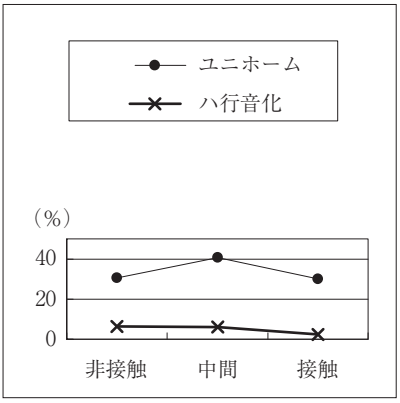

図２　接触度　ハ行音化

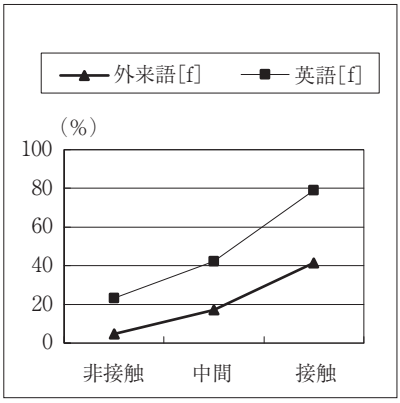

図３　接触度　［f］

(1) ハ行音化は接触度と直接関係していないようである。「非接触」と「中間」では6％前半とほぼ同じ値だが、「接触」では2.5％と比率が下がる。［ɸ］の円唇性が失われた結果ハ行音化が起こるとすれば、［ɸ］自体の生起率が下がるとハ行音化も当然減ると考えられ、［f］が多く現れる「接触」では少なくなるのであろう。

(2)「ユニフォーム」のハ行音化は「中間」のみが特殊な振る舞いを見せるが、「非接触」と「接触」の間にはほとんど差がない。この語についても接触度とは関わりがないと考えられる。

(3) 一方、［f］は、英語との接触度が高くなるほど、出現率が高くなっている。英語・外来語がほぼ同じようなカーブを描いており、英語での［f］の使用（習得）が外来語の発音のあり方に強く影響していると考えられる。

4.3.2.　発話に対する注意度

発話に対する注意度の違いによる結果を表9、図4に示す。

表9　注意度

	ユニホーム[1]			ハ行音化			外来語［f］			英語［f］[2]		
	度数	総数	（%）	度数	総数	（%）	度数	総数	（%）	度数	総数	（%）
絵を見て				30	431	7.0	83	489	17.0			
文章読み	101	205	49.3	233	2660	8.8	627	3480	18.0	202	410	49.3
なぞなぞ	37	205	18.0	79	2665	3.0	836	3485	24.0			
単語読み				73	2651	2.8	773	3467	22.3	292	612	47.7

1 ①絵を見て話す調査には「ユニフォーム」が盛り込めなかったため、データがない。
　また、④単語読み上げ調査では「ユニフォーム」と「ユニホーム」の2枚のカードを作成し、読み分けてもらうことを意図したため、この表にはふくめていない。
2 英語の調査語については①絵を見て話す調査や③なぞなぞ式調査を行っていない。

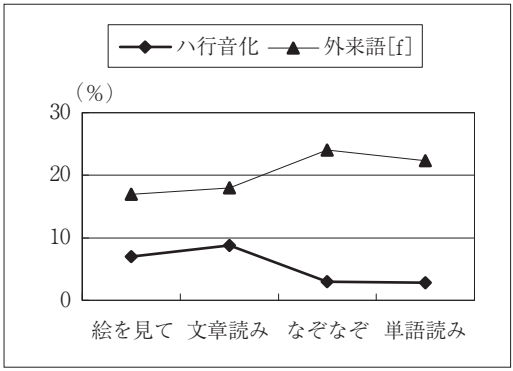

図4　注意度

表9と図4からわかること、考えられることは以下のとおりである。

(1) 4つの調査方法の中で、文章での発話（①絵を見て話す、②文章読み上げ）と単語での発話（③なぞなぞ式、④単語読み上げ）の間に大きな差が現れた。文章レベルの発話か語レベルの発話かといった違いが、注意度に大きく影響したとも考えられるが、多くの話者が調査目的に気付くのが③なぞなぞ式のときであり、発話に対する注意度が上がったとも考えられる。

(2) ハ行音化は文章よりも単語で少なくなり、［f］は文章よりも単語で多

くなっている。ハ行音化に関しては注意度が上がると減るが、[f] に関しては注意度が上がると増えるということがいえる。つまり、ハ行音化したものは威信が低いが、[f] は威信が高いと考えられる。

4.3.3. 話者別

本節では、話者別の結果について、非接触と接触に分けて示す。

ハ行音化率を縦軸にとり、[f] の出現率を横軸にとった各話者の散布図を図5（非接触）と図6（接触）に示した。データを見やすくするため、ハ行音化率は50％までしか軸をとっていないが、[f] は右端が100％であることに留意されたい。

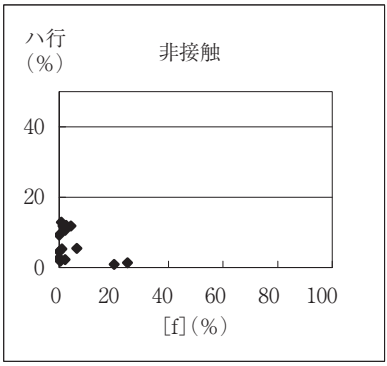

図5　非接触の話者の散布図

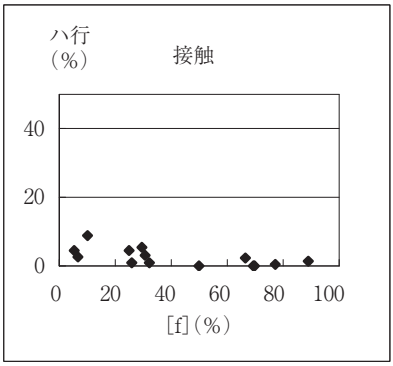

図6　接触の話者の散布図

この図からわかること、考えられることは以下のようなことである。

非接触の話者は左下に固まっており、ほとんど [f] が現れないことを示している。それに対して、接触の話者は下のほうでばらついており、[f] の出現に関して特に大きな個人差が認められる。

この個人差の説明としては次の2つが考えられる。一つは英語の [f] を習得しているかどうかという部分の個人差である。英語でも [f] の現

れない話者は、当然外来語でも［f］は現れない。もう一つは、英語の［f］を習得している話者の中に、外来語のファ行子音をほとんど［f］に取り替えてしまう話者と、そうでない話者がいるという個人差である。ここでは、前者を「取り替え派」、後者を「使い分け派」と呼ぶ。

「使い分け派」は3名ほどで、多くはあまり意識せずに使用している両者の中間である。日本語は［ɸ］だと意識していても、実際には［f］で言ってしまうという「接触」の話者も何人かいたが、「使い分け派」の中には調査目的に気付くと同時に［f］が少なくなる話者もいた。

注意度別調査の結果からは、［f］が全体的に高い威信を持つと考えられるが、ハ行音化したものが非標準形として疑いなく存在するのに対して、［f］は純粋な意味での標準形というわけではないらしい。英語との接触度の高い話者の中にも、日本語の標準形は［ɸ］だという意識が少なからずあり、原音重視の風潮が強まっているとはいえ、この変化が際限なく進むとは考えにくく、ある程度のところで、日本語らしさに回帰するのではないだろうか。

5. まとめ

本稿で明らかになったことをまとめると以下のようになる。

【ハ行音化現象】

(1) 音韻環境による影響が大きく、語中、後続母音 /-o/ という環境でよく生起する。逆に、語頭、後続母音 /-a/ という環境でもっとも生起しにくい。

(2) 英語との接触度に関しては直接の関連はなく、接触度のとくに高い話者で［f］が増加し、［ɸ］の割合が下がると、ハ行音化が少なくなるということが間接的に起こる。

(3) 文レベルの発話で多く生起し、語レベルの発話で少なくなった。ハ行

音化した発音は威信が低いと考えられる。

【原音［f］】

(1) 外来語音でない「フ」の場合に出現率が下がるが、それ以外の音韻環境の違いによる影響はほとんどない。

(2) 話者の英語との接触度が高いグループでより多くの［f］が出現した。

(3) 文レベルの発話で少なく、語レベルの発話で多くなった。［f］は威信の高い発音と考えられる。しかし、中には英語は［f］、日本語は［ɸ］と使い分けるべきだと考える話者もいた。

以上の結果から考えられるのは以下のようなことである。

［f］が高い威信を持って導入される背景には、英語発音の干渉という理由のほかに、ハ行音化現象という音韻環境の影響を受けた威信の低い音声変異を回避したいという動機があるのではないかと考えられる。

日本語固有の［ɸ］ですべてをまかなうタイプと英語の［f］ですっかり取り替えてしまおうというタイプ、英語では［f］、日本語では［ɸ］と使い分けるタイプの３種類の話者がいると考えられる。これはThomason and Kaufman（1988）で指摘されているとおりである。本研究で観察された［f］の増加という変化は、今後際限なく進むとは考えにくく、ある程度のところで、日本語らしさに回帰するのではないだろうか。

参考文献

石野博史（1974）「外来語の表記と発音―識者アンケート結果報告（2）」『文研月報』s49.7

井上史雄（2002）「西洋語の発音の影響」飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座３発音』明治書院　pp.59-84

加藤正信（1983）「東京における年齢別音声調査」『新方言とことばの乱れに関する社会言語学的研究』（『日本列島方言叢書７　関東方言考③（東京都）』ゆまに書房（1995）再収pp.（132）-（152））

永田高志（1988）「外来語の定着とその意識」『Sophia Linguistica』23/24

上智大学　pp.1-9
服部四郎（1953）「国語の音韻体系と新日本式ローマ字つづり方」『言語学の方法』岩波書店
松崎寛（1993）「外来語音と現代日本語音韻体系」『日本語と日本文学18』筑波国語国文学会　pp.22-30
Labov, W（1972）*Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia : University of Pennsylvania Press.
Thomason, S.G. and Kaufman, T.（1988）, *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics,* Berkeley, Los Angeles, Oxford: University of California Press.
Trudgill, P（1974）*Sociolinguistics: An introduction*. Harmondsworth : Penguin.　土田滋訳（1975）『言語と社会』岩波新書

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Phonetic variations of the Japanese *ϕa* line consonant /ϕ/ in loan words: The phenomenon of changing into *ha* line consonant and the inflow of the original pronunciation [f]

Takako Ohara

This study aimed to investigate the phonetic variations [ϕ][h, ç] [f] of the *ϕa* line consonant /ϕ/ that occur in foreign origin words as seen in the modern Japanese language. In general, Japanese pronounce /ϕ/ as [ϕ], but /ϕ/ has two other phonetic variations: [h, ç] changed into *ha* line consonant, and original pronunciation [f].

The study targeted 41 university students less than 30 years old, and involved about 17 words. The variables established as language internal conditions were: (1) the consonant location, (2) following vowel; and as language external conditions: (3) the speaker's degree of contact with English, and (4) the degree of attention to the utterance.

As a result, the following became clear.

[h, ç] changed into *ha* line consonant:

- The influence of the phonological environment is great; /ϕ/changes more into a *ha* line consonant when /ϕ/ is word internal(between vowels), and when the following vowel is /-o/.
- The prestige was judged to be low, as it appears most frequently when the utterance is at the word level than the sentence level.

Original pronunciation [f]:

- [f] was often observed within the group with the highest degree of contact with English.
- The prestige was judged to be high, as it appears most frequently when the utterance is at the sentence level than the word level. However, there were some people who use [ϕ]/[f] appropriately in the group with a high level of contact with English.

As seen from the above, [f] is adopted not only because of the influence of English, but also the evasion of the lower prestige [h, ç].

キーワード：外来語音，ファ行子音，音声変異，ハ行音化現象，原音［f］